

トロス司教座教会聖堂の発掘について

浦野 聡

キーワード

リキア 古代地中海世界 聖域 司教座聖堂 トロス

はじめに

私たちの調査チーム^①は、二〇一〇年夏、リキア地方（トルコ共和国ムーラ県フェティエ郡）の古代都市トロス *Tlos* の遺跡において、異教聖域跡に建てられたと推定される司教座教会聖堂遺構の発掘プロジェクトを開始した。このプロジェクトは四カ年にわたる第一次発掘計画において以下の諸点の解明を目指している。^② 第一に、聖堂の（１）建造時期、（２）放棄時期、（３）修築・改築時期、（４）改築各期における建築様式・装飾様式の変化、（５）各期における機能の変化、（６）建築に用いられたスポリア（転用材）

の由来を明らかにすること。第二に、聖堂建築以前にあった旧異教聖域の（１）区画範囲、（２）築造時期、（３）放棄時期、（４）機能・性格、（５）遺構・部材転用過程を明らかにし、（６）転用材に刻まれた古代碑文を解読すること。第三に、古代末期トロス社会におけるキリスト教信仰受容に伴う（１）異教信仰放棄・並存過程、（２）都市景観変容過程とその特質、（３）社会慣習（祭儀・礼拝・公共行事）変容過程とその特質を明らかにすることである。以下、やや立ち入って本プロジェクトの位置づけと意義についてあらかじめ述べておきたい。二〇一〇年度は、拝廊（もしくは前庭）全体と身廊・側廊の西側入り口から五分の一まで

にあたる部分の土を敷居石のレベルまで除去し、おそらく一二世紀以降のものと考えられる墓二基および六体の埋葬人骨を見出したが、なお調査途中であるので、発掘成果については、次年度以降の中間報告に譲る。

一、トロスという都市

まず、トロスという都市の歴史地理的な位置づけから述べよう。

トルコ半島南西部、幅約一三〇kmにわたって地中海にせり出す山がちの陸塊は、古来リキアと呼ばれた。トロスは、その西半、南北に走る標高三〇〇〇m級のアクダーラル山系（古代のクラゴス *Kragos* 山系^④）の西裾に位置する。古くは前一四世紀のヒッタイトの文書に *Dalua*、リキア語碑文に *Tlaua* の名で知られ、前一世紀の地理学者ストラボンが引用する前二世紀末の地理学者アルテミドロースによれば、リキア連邦を構成する三二都市中、六大都市のひとつに数えられた^⑥。アクダーラルの山並みを東に仰ぎ見ながらこれと並行に流れるクサントス *Xantos* 川の沖積平野はリキア最大の沃野であり、上述のリキアの六大都市のうち四つ（パタラ、クサントス、ピナラ、トロス）までがこの地に位置する。その平野を地中海岸から三〇kmほど内陸

に北行したあたり、標高約四八〇mの垂直に切り立った岬状の尾根が山裾の中途に突き出しており、その頂上がトロスのアクロポリスである（写真1）。そこからアクダーラルの主峰ウユルク・テペシに向かって東側は、いったん標高四三〇mにまで下り、再び緩やかに昇り出す開けた谷状の地形になっていて、トロス人はそこに、アクロポリスの陰に隠れるようにして都市を築いた（写真2）。冬にクラゴスの頂を覆う雪は夏にはすっかり溶けてしまいが、いかに酷暑の夏にも岩間から流れ出る豊かな水脈となって山系の谷と西の平野を潤す。天然の要害ともいえるべき地形に守られたトロスは、このような自然条件に恵まれたクサントス川以東の実り豊かな耕作地と、背後に控えるクラゴスの山腹の広大な山林と放牧地を治める支配権力の座所として最適の地であったようにみえる。

トロスとその領域は南北、東西に海と内陸をつなぐ交通の要衝でもあった。リキアがローマの属州とされたクラウディウス帝時代、当時リキア随一の海港都市パタラに建てられた *Stadiasmus Patarensis*（あるいは *Miliarium Lyciae*）として知られる属州内の都市（稀に村落）間の距離を記した巨大な記念碑によれば、トロスはピナラ *Pinara*（南南西）、テルメッソス *Telmessos*（西）、クサントス *Xantos*（南）、オイノアンダ *Oinoanda*（北北東）という近隣の有



写真 1



写真 2

力都市、アフラクサ *Araxa* (北)、カデュアンダ *Kadyunda* (北西)、カスタバラ *Kastibara* (北東) という山間都市 (および村落) に往還する街道上の結節点として現れる。この里程標石に記された四四の都市や村のうち七度も起点・終点として名を挙げられる都市はトロスを描いてほかになく、この事實は、いかにリキア諸都市の中でトロスが通行上重要な町と目されていたかをよく物語っている。とりわけ、パタラやクサントスと属州アジアの間の往来にはトロスないしその領域を通る道が至便で、現在のカラベル峠 (標高一三〇〇 m) を越える道は、オイノアンダ・バルブーラ *Balbura* を通ってキビュラ *Kibyra* 周辺の大理石産地や鉄製品生産地とリキアを結ぶ最重要の輸送路であったと思われる (図1参照)。リキアは緑豊かで木材や農産・畜産物の消費需要を満たすには事足りたが、とりわけローマ帝政時代、各都市で壮観を競った公共建築物建設ラッシュの需要に応じうるような大理石や鉱物資源の産を欠き、北方の属州アジア、とりわけカリヤ地方やフリュギア地方からの輸入を必要とした。

しかしながら、こうした交通路の確立はおそらくローマのコレクシヨンの中に、紀元前四十六年、連邦を組んでいたリキア諸都市とローマの間に結ばれた条約を記した青銅板

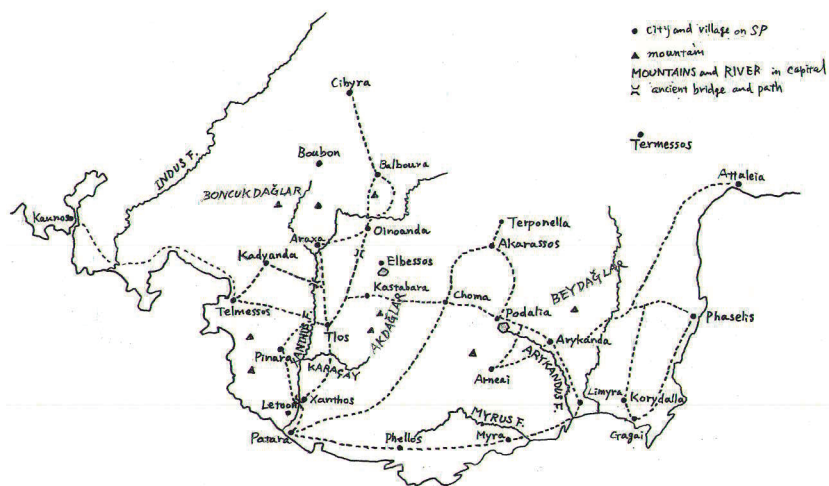


図 1. リキアとその周辺

が発見された¹¹。碑文校訂者ミツチエルは、この条約が締結されたとき、リキア連邦は北方のピシディア人／ソリュミス人たちと戦争状態にあり、独裁官カエサルの好意的な裁定によって、北辺の領土保持についてローマの後ろ盾を得たものと論じる¹²。この条約碑文が、リキア人に属すべき辺境地としてエルベッソス *Elbessos* とマサ山 *Masa Oros* を挙げているからである。前者は、トロスの影響下にあったカスタバラと、トロスの北東隣のピシディア／ソリュミス人系都市オイノアンダの中間に位置する山中の湖畔（現ギョルデフ湖畔）の小邑であり、後者はその東の山岳地帯のことであつた¹³。ストラボンの伝えるところでは、すでに前八四年、スラの代理官ムレナによって、ピシディア人／ソリュミス人の町バルブーラとブボン *Boubon* は、それまでテトラポリス同盟 *Tetrapolis* を組んでいた有力都市キビュラの影響から切り離されてリキアに編入されていた（キビュラはアジアにとどめ置かれた¹⁴）。これまで研究者たちは、それらの都市の南東側にあつた、ストラボンの言及していないオイノアンダもリキアに組み込まれたと考えてきた¹⁵。しかし、ミツチエルは、前四六年にエルベッソスやマサ山がリキアの辺境地のひとつとして挙げられねばならなかったとしたら、それら以北にあつたピシディア／ソリュミス人の都市オイノアンダはリキアに対する潜在的敵対勢

力として独立を保ち続けたに違いないとするのである。いずれにせよ、少なくとも前八四年以前と前四六年前後において、トロスから先リキアとアジアを結ぶ交通路が分断されていた可能性は高く、前一世紀半ばすぎまではリキア・アジア間の交通は安全なものとして確立されていなかったものと推測できる。それ以前は言うまでもない。アラクサから見つかった顕彰碑文によれば、前二世紀、ブボンの僭主モアゲテス *Mogetes* の攻撃を受けたアラクサ人は、まづブボンの宗主国に当たるキビュラに不当を訴えたが効果なく、却つて市民の多くを捕虜として連行されてしまうと、今度はリキア同盟に救済を願つたという。この碑文で顕彰されているオルタゴラス *Orthagoras* という人物はいずれの際にも使節を務めたアラクサの名望家で、彼はその後、トロスとクサントスで僭主が立つた時はそれらの動きを打倒するのに貢献したし、リキア人とテルメッソス（もし小テルメッソスならオイノアンダ、そうでなければその母市であつた西の山岳都市テルメッソス *Termessos* を指す）の間の戦争においてもリキア同盟側に立つて活躍した¹⁶。二世紀におけるキビュラとテトラポリス同盟、そしてリキア同盟やピシディア人との関係の歴史には不明の点も少なくないが、しばしば起こる都市間、民族間、あるいは民族内の争いは、リキア・アジア間の安全で大規模な交通や流通を

妨げたものと推測するのが妥当であろう。

帝政期に入って *Stadiusmus Patarensis* 設置の時点では、前四六年に敵対したオイノアンダとバルブーラ、そしておそらくブボン^⑮は再びリキアの都市に数えられており、都市間・民族間の争いは今やすっかり過去のものとなっていた。エルベツソスは後二世紀にはオイノアンダに帰属する村落のひとつとなり、ブボンはコンモドウス帝時代、市民たちが街道の山賊討伐に力を尽くした功によってリキア第一級の大都市と同格に列せられる。いずれの場合もカラベル峠を越えるメインルートには直接かわらないが、共和政期から帝政期に移行する一〇〇年の間に、それまで民族間の紛争地であったアンティクラゴス（現代のボンジュクダール）山系とクラゴス山系の合間の隘路に総じて平和がもたらされ、帝政高期ともなると山賊の活動を誘うほど活発なアジアとリキアを結ぶ交通・流通が出現したことを物語っている。 *Stadiusmus* は、トロスコ・オイノアンダをつなぐルートとしてアラクサを通るルートと、欠落により *Plata*…の部分のみ知られる集落を通るルートの二つを挙げている一方、オイノアンダ・バルブーラ間については山越えの近道と平野を通る迂回路の二つを並んで記す。特に後者については、快速便と重輸送便がそれぞれ用いたルートの併記を思わせる。いずれにせよ、アジアとリキアを結

ぶ、直線距離にして四五kmほどの区間に複数のルートが挙げられているという事実は、この間の交通や流通が脇道も必要とするほどに盛んとなり、また重要度も高いものとなされるようになりつつあったことを示しているものと考えたい。

トロスのアクロポリスを右手に仰ぎ見つつ都市への入場門を入るとすぐに競技場が眼前に広がるが、それと並行して走る一二（現存四つ）の連続した戸口を持つ横長の擁壁は、商業アゴラの付属建物のそれであったと考えられる。この建築物はミシアのペルガモン *Pergamon* からパンヒュリアのアスペンドス *Aspendos* に至るまでの地域の都市でいくつか確認されているタイプの、倉庫や店舗を含んだ立体型商業アゴラの特徴を示しており、^⑯海陸物産の集散地であったろうトロスの往時の賑わいをよく偲ばせてくれる。

二、小アジアにおける古典考古学の進展とトロス発掘プロジェクト

リキア地方の北の玄関口ともいえるトロスは、このような古い起源と豊かな経済力を持ち、地勢上重要な位置を占めたと考えられる都市ながら（しかし規模はさほど大きくない。劇場の座席数で一万内外である）、その調査は遅れた。

一九世紀前半のフェローズの探検^①以来、不完全で散発的な碑銘探査が行われた以外、科学的考古学調査は一九七〇年代にドイツ隊が行った表面調査^②が最初で、本格的発掘調査は、二〇〇二年に始まるアクデニス大学によるそれを待たねばならなかった^③。その理由の一端は、内陸都市が一般に古代地中海世界研究の枠組みの中では注目度が低かったのと、西洋古典考古学者の関心が早くからギリシア化された都市に向けられがちであったことによつていよう。トルコでも一九世紀末、本格的発掘調査はエフエソス *Ephesos*、ミレトス *Miletos*、プリエネ *Priene*、マイアンドロス河畔のマグネシア *Magnesia*、ヘルガモン *Pergamon* などエーゲ海沿い、あるいはエーゲ海に近い大都市から始まつており、内陸地域に関心が向く場合にも、碑文調査・表面調査にとどまつた。二〇世紀に入つてからも、ヒッタイト帝国（ハットウシヤなど）やフリュギア王国（ゴルディオオン *Gordion* など）に属する古い時代の遺跡発掘には目覚ましい成果があつたが、ローマ時代の遺構が多く残る遺跡の大多数は手つかずのままであつた。

前世紀後半から、ようやく事情が変わり、アメリカ隊によるサルデス *Sardis* やアフロディシヤス *Aphrodisias* の発掘を契機として内陸・山間都市の発掘調査が本格化し始める^④。とりわけリキア、ピシディア、フリュギア、カリア

といった地方の遺跡での急速な調査の進展は、この三〇年来の交通網・観光資源の開発・整備にうながされていることは疑いなくけれども、これらの先駆的な発掘調査による地道なデータの蓄積を通じた学術的関心の深化を背景にしていることもまた事実である。サルデスの大浴場付属のいわゆる「ビザンツ時代の店舗群」やアフロディシヤスのアフロディテ神殿跡に建てられた司教座聖堂や司教館、あるいは後期帝国の官僚たちに捧げられた数多くの彫像・碑文などの発掘は、これまで衰退の時代の残滓と考えられ軽視されがちであつた古代末期の遺構・遺物の重要性を知らしめ、特にそれまで未発掘であつた遺跡で、発展の各フェーズに注意を払い、フェーズの積み重なり方にも意味を見出すとする発掘調査の必要性を認識させたのである^⑤。近年ではヒエラポリス *Hierapolis*、アモリオン *Amorium*、ペッシヌス *Pessinus*、アイザノイ *Aizanoi* の発掘などがそうした遺跡の多層性・重層性によく配慮した発掘の代表例といえよう。今やギリシア・ローマ時代に典型的な構造物の発掘・復元を目的に古代末期や中世の遺構や遺物を記録も取らずに除去・解体することは極力避けるべきというのが研究者の共通認識になりつつある。

そうした動向を踏まえて精力的に組織的発掘を進め、最も充実した成果を公けにしつつあるプロジェクトの代表

格は、ベルギー隊を核としたピシディアのサガラッソス *Sagalassos* の発掘⁽²⁹⁾であろう。しかし、それだけでなく、小アジア西南部で今や全く手つかずの遺跡はよほど辺鄙なところにはないといえるほどで、大小さまざまな規模で行われる発掘の成果が、随時『アナトリア研究』などの専門誌やシンポジウムで報告されるほか、数多くの新発見の碑文は『パピルス碑文学報』(ZPE) や『エピグラフィカ・アナトリカ』(EA)、『ギリシア語碑文補遺集』(SEG) あるいは「小アジアのギリシア都市碑文集」(IGSK) シリーズの単行本などの中で陸続と公刊されている。そして、これらの成果は、かねて「古代地中海世界」と呼びならわされて久しい歴史的世界における、内陸に広大な領域を持った都市の重要性にあらためて我々の目を開かせつつある⁽³⁰⁾。すなわち、内陸都市が、周辺の一次・二次産品（木材、石材、農畜産物、陶器など）の生産や地域内／地域間の流通に果たした経済的役割のみならず、都市的アメニティや宗教施設・祭儀・娯楽（競技会や演劇など）の競争的提供（他都市との競争と提供者同士の競争）、それらへの皇帝・総督の裁可獲得、その事実の碑文による宣伝・記念行為を通じて、名望家が地方的権力を獲得・維持し、市域や周辺領域の住民たちを帝国支配に組み込んでいく政治的・文化的メカニズムのありように関心が向けられるようになってきた

のである⁽³¹⁾。もちろん、都市周辺の農村領域まで含めた研究調査が進んでいるとはなお言い難く（それは長径五〇kmにもおよぶサガラッソスの、上述の発掘プロジェクトの一環としての調査や、一九九〇年代より続けられているコンヤ平原の定住地分布・規模についての環境考古学調査などによりようやく緒についたばかりの感がある）、また一つの都市の市街地ですら完全に発掘しつくされ、統計的に十全の信頼を持つて処理しうるような碑文・考古学的データを得ているというケースもない⁽³²⁾。しかしながら、都市遺跡を農村地帯というあたかも不毛の絶海に浮かぶ輝ける文明の孤島のようにとらえ、その目立った建築物を復元し価値ある美術品や貴金属を博物館に収めてよしとするスタイルの考古学は過去のものとなり、斬新な理論や方法論を駆使しながらそれぞれの遺跡・遺構群をひとつのシステムとして地域の社会・空間構造の中に位置づけて理解しようとするスタイルのそれ、また刻まれた文字を取り巻くあらゆるデータを社会的コンテクストの中に位置づけて理解しようとするスタイルの碑文学がいたるところで主流となりつつある⁽³³⁾。その際、内陸都市や、沿岸都市でも内陸に向かってしかるべき広さの領域を持つ都市に地域の拠点としての経済的・政治文化的役割があり、またすべての都市内の建築・構造物、あるいは碑文が、その大きさや空間構成上の配置

に政治的社会的意味を有していたであろうという見通し¹¹ 仮説は優れて有用で、都市の遺構や遺物の残り方や積み重なり方、碑文テキストの記録・残存状況にまで目を配りながら、この仮説を具体的に検証することが、都市遺跡発掘の際の避けぬ課題となってきた。トロス発掘は、このような課題を十分意識して開始され、また今後も継続されるべき学術プロジェクトのひとつである³⁵。

三、トロス発掘プロジェクトにおける聖堂発掘の意義

さて、そのような課題を念頭に置きつつトロスの発掘に取り組むとき、それぞれの発掘対象遺構や発掘遺物を空間的・時間的コンテキストの中に可能な限り正しく位置づけることが必要となる。これは、現地表面に見えている古代末期・ビザンツ時代にかけての発掘対象遺構が、その下から出土するそれ以前の遺構といかなる重層性(断絶・継続)を示しているか、また、各フェーズで発掘される建築物や碑文が、同時代のそれらとの相互的連関の中でいかなる意味や機能を有したかを明らかにすべきということである。その点、トロス司教座教会聖堂の発掘は、トロス発掘プロジェクト全体の中でも特別の重要性を持つ。すなわち、この聖堂は、空間上、この都市に居並ぶ主要な公共建築物群

の真つ只中に位置しているからであり、他方、時間上は、ローマ時代の都市の中心聖域に存在した異教関連の構造物を取り去ったのちに建築されている可能性が高いからである。トロスでは、古代末期／ビザンツ期の聖堂発掘は古代の聖域の発掘にほかならず、それぞれ都市の社会生活の中心点にあった聖堂と聖域の発掘は、ローマ帝政期と古代末期／ビザンツ期という二つのフェーズ(あるいは中世に増築・再建があったことが確認されればさらに多くのフェーズ)におけるトロスという都市の社会生活や社会精神の変化の過程をよく示してくれるものと期待される。この点、とりわけ、そこで行われる宗教的行為¹¹ 祭儀と礼拝との関連で、もう少し立ち入って説明を加えておこう。

あらためて言うまでもなく、古代地中海世界において各都市固有の祭儀は、都市内外の社会的紐帯や政治的力関係を定期的に確認・更新する絶好の機会であった。それゆえ、祭儀のあり方は、一般に、それぞれの都市の公共建築物や碑文メッセージの機能とトポロジー、そしておそらくその外観のあり方とも深くかかわっている。なによりまず、都市の主神や皇帝神を祀る神殿はあらゆる祭儀の出発点であり終着点であった。都市によっては、神像を内陣から出し、女性も含めたすべての市民の礼拝を誘うことは祭礼の重要な恒例行事になっていた³⁶し、通例、神殿の前の祭壇では、

祭儀の間中絶えることなく香がたかれ犠牲がささげられていた。劇場・オデオンや競技場は、幾日も続く都市祭典の呼び物となった奉納体育・芸術競技の場であり、運動場と浴場は体育競技に備えての運動と休息・清めの場でもあった。祭司や都市の公職者を先頭にさまざまな祭礼団体が連なるプロセションは目抜き通りを厳かに通り過ぎ、市の開かれるアゴラやバシリカは都市領域の内外から祭礼や競技観戦に訪れた人々によって終日賑わい、そこでは市民たちの共同食事も行われた^{②③}。それらの祭儀に参加し、あるいは、観覧する道すがら、人々は、公共建築物の目立つところに刻まれた碑銘を目にし、この一年にだれがどのような都市を飾るのに貢献したか、また祭礼の設置を皇帝に願い出したのはだれか、その資金提供者はだれか、毎年のコンクールの優勝者は誰かなど、都市内の権力や権勢にかかわる出来事を的確に知ることができた。要するに、公共建築物や碑銘の多くは、市民生活のハイライトとしての祭儀とのかかわりの中でこそその意味を最大限に発揮し、それゆえ祭儀空間としての都市の公共スペースを埋め尽くしていったのである。

それだけではない。都市の名望家たちは、建築物や、祭儀それ自体の新設・維持にも出費を惜しまなかった。祭儀は、市民たちの間で精神的モニュメントとして後世に残る

ことで設立者・維持者にとって永続的な政治的・社会的効果を発揮した、あるいは、発揮することを期待されたからである。それぞれの都市が持つ神格はその起源の古さと効験のあらたかさを競い、それぞれの神格に捧げられた祭儀や神殿、そしてそれを取り巻く公共建築物はその都市の顔として壮麗であるべく念入りに設計された。神と神殿の顔が高まり、参拝・巡礼者を集めれば集めるほど、都市の経済も潤い、都市の政治家たちはその財力を増すことができた。都市の祭儀とそれと密接に関連付けられた公共建築・碑文メッセージは、都市の政治を動かす支配者にとっても、また、都市内外に居住する市民や村人にとっても、我々現代人にとってよりはるかに重い社会的・政治的意味を持っていたといえる^{②④}。

トロスは、中世にいたるまで司教座として存続した都市であり、その後も一介の集落にすぎなくなつたとはいえず、今日まで居住され続けたので、各時代に放棄された建築物の部材は再利用されたり、持ち去られたり、あるいは新たな建築物を作る際のセメント原料としてすり潰されたりして、古代における建築物や碑文の空間的・社会的コンテキストは見えにくくなってしまっている。また、不使用に帰した構造物は、土砂の堆積に埋もれてしまっている。しかし、それにもかかわらず、上述のごとく、古代都市の公

共建築物群が、司教座聖堂のあった区域を焦点として配置されていたことは疑いない。それぞれ北東と北西にやや離れて存在する劇場（T）と競技場（S）を除けば、司教座聖堂の遺構（C）が建っている一〇〇m×六〇mほどの区画は、西に運動場（P）を備えたギムナジウム（G）、南に大小二つの浴場（B）、北に商業アゴラ（CA）、またこれは確証されていないがヴルスターの推測によれば東に国家アゴラ（SA）とすぐ隣接しているからである（図2参照）。この区画がギムナジウムや浴場のある平面から二mほど石垣積によって高くなっているのは、この区画全体が古代の聖域（temenos）であった可能性を示唆しており、その北寄りには聖堂遺構、南寄りには都市の主神クロノスの神殿の遺構（KT）が位置する。現在、村人一家の居住する家屋と公道が聖堂遺構と競技場・アゴラの間にあるため十分にその構造は明らかになっていないけれども、劇場方面から競技場に通じる地下のアーケード式通路の遺構が途中まであらわになっている。いくつかのすでに公刊された碑文や、また、まさに聖堂遺構の部材として転用された石材（古代の建築物のアーキトレープの一部か）に刻まれた未公刊の碑文から、この都市が体育競技を伴った大クロノス祭（*Megala Kronia*）を持っていたことが知られるが、この祭儀の際、浴場で体を清めた競技者たちの祭列

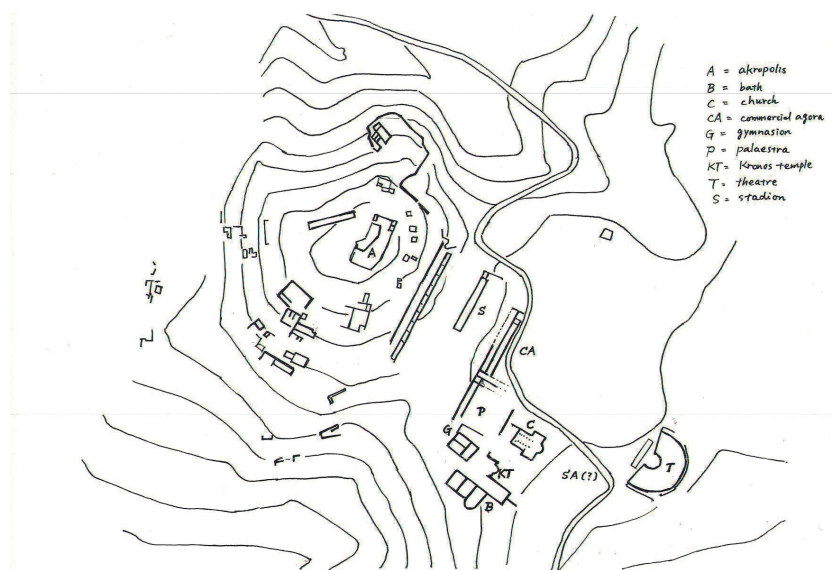


図 2. トロス全図

は神官や政務官を先頭にクロノス神殿前を出発し、ちょうど聖堂遺構が建っている区画の東か西のいずれかの側からアーケード式のこの通路を通って競技場に向かったであろう。そのような祭列の動線を想定すれば、まさに、浴場・クロノス神殿からアーケードに向けて横切ることになる聖堂遺構のある区画は、祝祭の際にも重要な意味を持つ空間であったと考えるべきである。そこが、聖堂建設以前にいくかなる建造物で埋められていたかは、現在のところ不明であるけれども、単なる広場であったとは考えがたい。聖堂に転用された部材には、クロノス神殿の部材とは違った浅い飾りフルートを施された柱やフルートを持たない柱（この柱材は聖堂の身廊と側廊を仕切る列柱に（も）用いられたようである）、コリント式の柱頭やアッティカ式の柱礎などが見られることから、柱列を持つストアのような構造物が建っていた可能性がある一方、これらの部材を用いて建てられた、クロノス神殿とは別の宗教施設が存在した可能性もある。後者として期待されるのは、この都市の創設伝説に関わる「三兄弟神」の神殿^③、レトオン（クサントスの聖域）から見つかつた前二世紀の半ばの未公開碑文に現れるアルテミス神殿、そして皇帝礼拝のための施設のいずれかであるが、まったく異なる神格を祀る神殿であった可能性は、我々がこの都市で信仰された神格について多くの

知識を持たない現在、当然に排除されない。ともあれ、我々は、聖堂遺構区画の発掘を通じ、より古い建造物の遺構や建材に再利用された顕彰碑などの発見により、これまで知られていなかった古代のトロスにおける神格、祭儀、空間構成、社会関係について豊かな知見を得ることができようし、そのことは、トロスの古代都市としての性格・特徴を明確にしてくれよう。ローマ支配下におけるトロスについては、現状では、リキアの六大都市のひとつであったということ以上にほとんど知られていないのである。我々の発掘と並行してアクデニス大学隊がクロノス神殿の発掘を始めており、両隊の情報交換や協力により一層の成果を期待しうる。

翻って、私たちは、司教座教会聖堂が建てられて以降のトロス社会について考えるとき、空間構成の面からは、それがそれ以前とかなり異なる社会となっていたという前提から出発すべきと思われる。なるほど、古代の聖域の上に建てられた聖堂は、都市の公共空間の只中であって依然として都市の人々の精神的なよりどころ、社会的紐帯や権力関係の確認・更新の場となつたであろうから、そうした意味では聖堂とそこで行われる典礼・礼拝の担つた社会的役割は、古代の聖域と祭儀が担つたそれを代替したと考えるとよい。司教以下の聖職者たちがそこを通って祭壇へと向か

う身廊と、一般信徒がそのさまを眼前にしながらか神への祈りをささげる側廊は、腰高のバラベツトによって厳然と仕切られ、側廊では身分の高い者、権勢のある者から順に祭壇に近い席を占めるのが常であつた。聖堂の空間は、神と天上世界の栄光をたたえながら、そのような此岸における権力関係や社会的威信の陳列所の様相を呈していたのである、典礼に参加する人々は、週二回行われるミサのたびごと、それらの所在を目の当たりにすることになった(トロス司教座聖堂でも身廊と側廊を分かつバラベツトが、いつの時代のものかはまだ明らかになつてはいないが、確かに現存している)。しかし、ビザンツ建築史の大御所クラウトハイマーが指摘する通り、聖域に建つ古代の神殿と古代末期のキリスト教の聖堂では、建築物としてのその機能は全く異なつていた。聖堂で行われるキリスト教の典礼は信徒のいわば「秘儀」であり、異教徒はもちろん、洗礼志願者さえ中に招き入れることは許さなかつた。それは部外者を排除するために閉じられた空間で行われなければならず、そのため、聖堂は少なからずの信徒を収容しうるだけの広さを持つ必要があつた。⁽⁴⁶⁾こうした聖堂空間のあり方は、神像が安置された内陣には祭儀参加者の収容を想定せず、広く公開で祭儀を行うという古代の聖域空間のそれとは対照的といえ、人々は閉じられた空間の中で、否応なしに天

上とこの世の秩序と規範に向かい合うことを余儀なくされたのであつた。

さらに宗教空間の構成を考えるうえで特筆に値するのは、キリスト教がその祭儀の中に一切奉納体育競技や演劇を含まず、自らの祭礼や典礼を行うのに、聖堂とその関連施設以外、他の公共建築物を必要としなかつたということである。すなわち、古代の都市祭儀のトポロジーにおいて公共建築物群を有機的に結びつける開放的機能を果たしていた聖域に、自己完結的で閉鎖的な宗教施設であるキリスト教教会聖堂が建てられたなら、それは都市祭儀の機会に社会的紐帯や権力関係を定期的に確認していた人々の有意的動線を断ち切る一方、聖堂以外の個々の公共建築物が持つていた聖性Ⅱ宗教的含意を否定することにならざるをえない。浴場からは清めの機能が、劇場や競技場からは奉納公演提供の機能が、運動場を備えたギムナジウムからは宗教教育の機能が、広場からはそこで聖なる共同食事を提供する機能がそれぞれ永久に失われ、それに応じてこれらの公共建築物は、純粹に世俗的機能において市民生活上の必要性がある場合にはかろうじて維持されるが、ない場合には不使用に帰していくことになるであろう。古代末期からビザンツ期にかけての建造物の新築は、教会や修道院以外、リキア地方全体で目立って減り、ローマ帝政時代にあ

れほど競いあわれた都市への恵与志向やそれに伴う碑文慣習も下火になるが、それもごく自然の成り行きであつたろう。市民生活のキリスト教化とその精神的焦点としての聖堂の建設は、古代都市社会の空間構成とその社会的機能がそのまま維持されるのを許さなかつたといえる。

さて、トロスの聖堂は、古代の都市の公共建築物の多くと軸線は共有するものの、浴場やクロノス神殿から、アゴラ、劇場、競技場へと向かう順路の上に、長辺を横にして建っている。聖堂西側のアトリウムは聖域の西端までを占めつつ、高い囲壁で仕切られており、この囲壁に開いた門を通じてアトリウムを抜けない限り、クロノス神殿からアゴラ・競技場に出ることはできない。そこにこの建造物と古代祭儀の動線・トボロジ^⑧との親和性を読み取ることは難しい。もしこうした設計がキリスト教の公認・国教化という四世紀の一連の流れの中で意識的に行われたものであるならば、我々は、そこに古代都市祭儀の動線を妨げる明確な意図を読み取り、キリスト教時代の到来とともにトロスに社会関係や社会精神の劇的な転換が起こつたと見るべきであろう。他方、五世紀以降、神殿・聖域が不使用に帰して久しくしてから起こつたことであるならば、キリスト教時代における古代祭儀の自然な衰退と、それに引き続く新しい古代末期的な社会関係・精神の漸次的再編成を見て

よからう。B・ウオードパーキンスが二〇〇〇年に着手を予告した「異教神殿のキリスト教会への再編成」調査プロジェクトの予備報告によれば、ローマ帝国西部では異教神殿の教会聖堂への転用は避けられた一方、東部では（もちろん西部と同様のケースも少なくないが）、大きく分けて二種類の方法で異教聖域のキリスト教会への転換が進んだという。すなわち、シリア、パレスティナ地方に観察されるような異教神殿の徹底的な破壊の上に聖堂を築くやり方と、バアルベック *Baalbek* やゲラサ *Gerasa* に確認される、異教神殿は脱聖化後放置したままで、その前庭部に聖堂を築くやり方である。その中間形態として小アジアのアイザノイやアフロディシアスに見られるような、神殿を多かれ少なかれ改築して使うやり方がある。

ウオードパーキンスは、このような東部型の教会建設の方式に「勝利者主義的ポリシー」を見て取るが、そうしたポリシーの地域的多様性は一層の検討に値する。トロスの聖堂のプラン（図3）は、パタラやペルゲ *Perge* でそれぞれ最も大きな聖堂（それぞれ通称「城壁外の大バシリカ」と「バシリカA」）と同じく、連続式十字翼廊型バシリカ様式で、拝廊と前庭の区別がつきがない点（あるいは拝廊が存在しなかつた点）、翼廊まで側廊が続いていたらしい点、アプシスの脇に付属部屋が付いていた痕跡を残す点に

においてそれらのプランと明白な共通性を示している(本号
深津論文参照)。こうした、リキアからパンヒュリアにか
けての聖堂建設における地域的な共通プランの存在は、司
教座都市編成計画における何らかの一貫した政策や、司教
座聖堂築造場所選定における共通パターンといったものが
あった可能性をほのめかしている。パタラやペルゲでは、
中心的聖堂(おそらく司教座聖堂)は、トロスのそれほど
ではないものの、古代における市街地の中心に近いところ
に位置しており、帝国西部において見られるような古代の
都市域からの独立性は示していない。私たちは上で、トロ
スでは、神殿跡に聖堂が建てられたものと推定しているこ
とを述べたが、もし、そうした推定が当たっているとすれ
ば、発掘調査がいまだに行われていないペルゲやパタラの
ケースでも、同じような仮説を立てて考えてみることでで
きるかもしれない。古くからパタラはアポロン崇拜で、ま
たペルゲはアルテミス・ペルガイア崇拜でそれぞれよく知
られ、広く信仰を集めていた。両都市の発行する貨幣のレ
リーフにもこれら二柱の神格はしばしば現れている。ここ
ろが、それほど高名であつたこれらの重要な神殿と聖域は、
いずれの遺跡でも未発見なのである。

トロスで、聖堂がいつ建造されたのか、以前の建造物の
遺構を一部にせよ用いているのか、あるいは完全な破壊の

上に建造されているのか、また以前の遺構が存在したとす
れば、それはどのような性格の建築建造物であつたのか、
その建築物に刻まれていた社会に対する古代の人々のメッ
セージ(＝碑文)は、構造物の除去の際、どのような扱い
を受けたのか。こうした疑問に答えうるような発掘データ
の蓄積により、私たちは、古代末期における聖域空間の
再編成のあり方について、「リキア・パンヒュリアモデル」
といったものを提示できるかもしれない。そうしたことが
可能になれば、今後、パタラやペルゲなどの大都市で本格
的に着手されるだろう聖堂の発掘に貴重なモデルケースを
提供することもできようし、またなにより、伝統的ギリ
シア・ローマ宗教からキリスト教へとという宗教潮流の大き
な転換の時代に、ローマ帝国の普通の市民たちの社会精神
がどのような転回を遂げていったかという、史料の偏りに
よってなかなか答えることのできな大きな問題に見通し
を得ることもできよう。トロスという文献史料にもよく知
られていない目立たぬ一地方都市の聖堂・聖域発掘にも、
古代から中世にかけての都市の発展史を考えるうえで、そ
のような小さからぬ意義がある。

註

- (1) トロス発掘プロジェクトは、総責任者アクデニス大学のタネル・コルクート教授の下、浴場、アクロポリス、神殿、スタディオンの発掘を担当するトルコ・アクデニス大学隊と劇場の測量を担当するドイツマクデブルク大学隊、そして教会聖堂発掘を担当する日本隊が分担・協力している。日本隊のメンバーは、二〇一〇年度は浦野（立教大学）、師尾晶子（千葉商科大学）、深津行徳（立教大学）、寺内正明（民間）、金指もと子（立教大学学生）、二〇一一年度は金指以外の四名に加え、太記祐一（福岡大学）、益田朋幸（早稲田大学）、海老原梨絵（早稲田大学）、田中咲子（南山大学）からなる。

- (2) 二〇一〇年度の発掘資金は立教大学より、「立教大学学術推進重点資金（SFR）自由プロジェクト研究」の援助を受けた。二〇一四年度以降の第二次の発掘プロジェクトは、聖堂遺構の保存を図りながら、神殿遺構の発掘を行っているアクデニス大学隊とデータの突合せ・交換をしつつ聖域全般の構造と性格を解明することを予定している。

- (3) 最初期からビザンツ期まで含めたトロスの歴史の概略については、H. Hellenkemper und F. Hild, *Tabula Imperii Byzantini* 8, Lykien und Pamphylien, Wien, 2004, Teil 2, 885-888

- (4) 最近、S. Sahin and M. Adak, *Stadasmus Patarensis. Inhera Romana Provinciae Lyciae, Ege Yayınları*, 2007, 122ff. は『シビラの預言書』に現れる記述を解釈し、アクダラルを従来考えられてきたマシキウトス *Mas(s) ikytos* 山系ではなく

クラゴス山系と同定したが、その解釈は説得力に富む。リキア同盟の貨幣には、それぞれクラゴスとマシキウトスの略号として KR と MA が現れるが、KR の略号を持つリキア同盟の貨幣が都市の名前と結びついて現れるときは、クサントスとトロスのものであるという点も彼らの主張にとつて有利である。 Cf. S. Jannesson, *The Lycian League: Some Problems in its Administration*, *ANRW* 7-2, 841, n. 49

- (5) G.E. Bean, *Lycian Turkey An Archaeological Guide*, John Murray, 1978, 65. トロスの初期の歴史については、E. Raimond, *Tlos un centre de pouvoir politique et religieux de l'âge du bronze au IV^e siècle av. J.C.*, *Anatolia Antiqua* 10, 2002, 113-129

- (6) Strabo 14. 3. 4

- (7) L. Robert, *OMS VII* 539ff. はスシウルナのクイントスの一節 (X 163) にトロスの近くにあるといわれている *Titanis Petra* (巨人族の岩) をこのアクロポリスと考えるが、Sahin and Adak, *op. cit.*, 131 は今日の景勝地サクリケントのあるあたりと考える。

- (8) 一九九三年に初期ビザンツ時代の城壁の中から積石として再利用されていた六〇点近い切石が見つかったが、それらはもともと七 m 近い高さの巨大な記念碑の部材であった。そのうち五〇点以上には碑文が刻まれており、復元してみると、そこには属州総督のクラウディウス帝への奉獻を示す前文に続いて、リキアの諸共同体を結ぶルートの距離が列挙されていることが明らかであった。その最初の本格的校訂版である Sahin and Adak, *op. cit.* によれば、あわせて六五区間を確認しうる。シャヒンとアダックは、これを「リキアが属州に編入されるきっかけになった内乱・騒擾（の

解決を記念した碑とみなし、公道の建設や修復の際に建てられる里程標石ではなく、属州全体が調和してクラウディウスの治に服していることを象徴的に記念するモニュメントとみなす。Cf. *ibid.*, 11, 111f.

(6) *Sabin and Adak, op.cit.* は上記街道中、北東へ向かうそれ以外の六つが、トロスからみて西に直線距離で6km行つたところ、今日クサントス川の西側を並行して走る国道四〇〇号線近辺で交差していた可能性を指摘する (*ibid.* 付録の地図参照。また 129f)。しかし、彼らも認める通り、トロスと並んで六大都市に数えられたパタラ、クサントスいづれもクサントス川の東側に位置していたから、クサントス川の東にパタラからクサントスを通ってトロスに向かう道筋があった可能性は残る。確かにクサントス近郊でクサントス川にかかる古い橋の遺構が確認されており (*ibid.*, 119) に写真。それがクサントスからピナラ/シディマに向かうのに用いられたことは確実)、またトロスからテルメツソス(現フェティエ)に向かうためには必ずクサントス川中流を渡らねばならないから、クサントス川に下流と中流にそれぞれ橋が架けられ、クサントスからトロスへ向かう際には、いったん川の西側の筋に出て再度東側に戻ったとするシャヒンとアダックの推測はその限りで一定の説得力を持つけれども、スタディアスモスの碑文が示す距離データは彼らの説にとって不都合である。すなわち、それが示すクサントス・トロス間の距離は一五二スタディオン(≒約二八・三km)で、直線距離二二・四kmに対して二〇%長くくなっている(B.113)。これは、現実の道路が、地理的障害物を避けねばならない関係上、当然のことであるが、その差は、必

ずクサントス川を渡らねばならないトロス・ピナラ間(二二kmに対して直線一四・四km cf. B.110)やトロス・テルメツソス間(三五kmに対して直線二五・二km cf. B.118)で、現実の街道の距離が直線距離に対して四〇から五〇%長くくなっているのに比し、ずいぶん小さい。この事実はクサントスから北北東のトロスに向かう道が、トロスからピナラやテルメツソスに向かう道と比べ、直線で結んだ線からそれほど大きく外れてはいなかったことを示唆している。確かに、クサントス川の東側には、クラゴス山から流れ出てクサントス川に合流する水量豊かで幅広いカラチャイ川(クサントスとトロスの領域を分けたと想定される)があり、そこに古代の橋の痕跡は確認されていない。しかし、トロスからテルメツソス等へ向かう道筋でクサントス川にかけられた橋の痕跡も見つかっていないわけであるから、カラチャイ川に架橋がなかったとする沈黙の議論は避けねばならぬ。また、カラチャイ川が切り立った山肌を切りさいて平野に流れ出る地点、巨大な岩山のほぼ垂直に切り立った裂け目から豊かな水流が流れ出ているのが印象的な渓谷景勝地サクリケントには現在セメント造りのさほど大きくない橋が架かっており、そこに架橋の痕跡の残りにくい木造の橋が架けられていた可能性もある。その一方で、それぞれトロスからテルメツソスとピナラへ向かう道は直線距離よりずいぶん長いから、これらの都市に向かう際に用いられたクサントス川中流に架かる橋は、シャヒンらがトロスとピナラをほぼ直線で結んだ線とクサントス川の交わるところに想定した場所よりも数km上流に架かっていたと考えたほうがよからう。さらに、トロス・アラクサ間(二二・二

トロス司教座教会聖堂の発掘について（浦野）

km に対して二〇・八 km cf. B. 1.28）とトロス・カデュアンダ間（二九・六 km に対して二一・七 km cf. B. 1.27）の距離比は、やはり現実の道路の距離が直線距離に近いのに対し、アラクサ・カデュアンダ間（二〇 km に対して一三・三 km）は五割増しになっている。クサントス川上流、ケメルから四・五 km 北に古代の橋が架かっていることに照らし、トロスからそれぞれ両市に向かう道は、クサントス川の東側を北上した後、この橋の架かる地点で分岐しており、カデュアンダからアラクサへ向かうのもこの橋を利用していたと考えるのが自然である。筆者はクサントス川西岸に六差路を想定するシャヒンらの推測を退け、トロスの町自体が東西に向かう街道網の結節点であったと考えたい。

- (10) パタラからコンバー・コーマー・アカラツソス（現エルマル）を抜けるクラゴス山系東側のエルマル高原ルートは、石器時代から独自の文明が栄えたところであり、今日でもローマ時代の街道の痕跡が残るが（*ibid.*, 191 に写真）、水資源に乏しく、灌漑用のダム湖ができた今日でも人口希薄で岩がちな荒涼たる風景を見せる。リキアの主要都市とアジアを結ぶ内陸ルートとしてこの道が主要な役割を果たしたとは思われない。

- (11) S. Mitchell, *The Treaty between Rome and Lycia of 46BC*, R. Pintaudi (ed.), *Papyri Graecae Schøyen* (*P Schøyen D*), Firenze, 2005. 彼は、青銅板がリキア同盟の聖域レトオン由来ではないかと推測する（*ibid.*, 183）。
- (12) Mitchell, *art.cit.*, 228-230
- (13) *ibid.*, 215-216; D. Rousset, *De Lycie en Cabalide: la convention entre les Lyciens et Termessos près d'Oinoanda*.

Fouilles de Xanthos 10, Geneva, 2010, 140 は、エルベッソスの位置をギルデアフ湖から一〇 km 東のエルビスダー東麓に置く。一九九九年に公刊されたエルベッソス二人の墓碑がそこから発見されたからである（現在は、写真が A. V. Çelgin and G. Çelgin, *Research in East and Northeast Lycia*, in: O. Belli (ed.), *Istanbul University's Contributions to Archaeology in Turkey* (1932-2000), Istanbul, 2001, 392-399）。しかしその場所は、オイノアンダからみて標高二六〇〇 m のエルビスダーのちょうど反対側にあり、そうした場所が長らくリキア人とオイノアンダの係争地であったばかりか、後述することくのちにオイノアンダに帰属させられたとは容易に信じがたい。ここでは、上記碑文も筆者未見につき、さしあたり Bean, *op.cit.*, 175 の同定を採用しておく。

- (14) Strabo, 13, 4, 17; C. F. Eilers and N. P. Milner, Q. Mucius Scaevola and Oenoanda: A New Inscription, *Anat. Stud.* 45, 1995, 87f.
- (15) たゞせば、Bean, *op.cit.*, 29, 162
- (16) G. E. Bean, *JHS* 68, 1948, 46-56; E. S. Gruen, *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, UCP, 1984, 732f. モアゲテスという名前の僭主は、前一八九年と前八〇年代後半にキビュラに現れるが、前一四〇年代にブボンにも現れる。グルエンはこの碑文に現れるモアゲテスを後者と考える。それに対し、Zimmermann, *Klio* 75, 1993, 125ff. はこの事件を一八八年から一六七年のリキアのロードスへの従属時代のものと考え、一八九年に現れるキビュラの僭主と同定する。
- (17) 一九九三年にクサントスの聖域レトオン *Leton* (二 km 南西) から見つかった二世紀の碑文 (D. Rousset, *op.cit.*, 6-13) には、

小テルメッソス（＝オイノアンダ）とリキア同盟の間で結ばれた条約を一一一行にわたって記録しているが、通行料と境界係争事件をめぐる取り決めに刻んだものであるこの資料は、この条約締結以前のピシディア人とリキア人の間の緊張関係を裏付けるといえる。ルーセはこの碑文を前一一五〇年代のものと考えている。

(18) Bean, *op. cit.*, 175

(19) F. Schindler, *Die Inschriften von Bubon (Nordlykien)*, Böhlau, 1972

(20) Cf. V. Köse, 'The origin and development of market buildings in Hellenistic and Roman Asia Minor', in: S. Mitchell and C. Katsari (eds.), *Patterns in the Economy of Roman Asia Minor*, Classical Press of Wales, 2005, 139-166

(21) C. Fellows, *Lycia*, London, 1840

(22) W. W. Wurster, *Antike Siedlungen in Lykien. Vorbericht über ein Survey- Unternehmen im Sommer 1974*, *Arch. Anz.* 91, 1976, 23-49

(23) リキアでは、一九五七年に起こった巨大な地震のために、いくつかの遺跡が深刻な被害を受けたといわれている。土地の人々からの伝聞によれば、たとえば、トロスの劇場のスケネーは、この地震の前はその完全な高さをとどめて立っていたが、崩落して現在はほとんどその原形をとどめない。Bean, *op. cit.*, 38がテルメッソスにおけるこの地震の被害について簡単に記している。また、二〇〇二年以降のトルコ隊の研究成果は未公開である。

(24) それ以前のイギリスのトルコにおける発掘については、最近阿部拓児『西洋古代史研究』10、二〇一〇年の

紹介がある D. Challis, *From the Harpy Tomb to the Wonder of Ephesus: British Archaeologists in the Ottoman Empire 1840-1880*, Duckworth, 2008 に詳しい。

(25) ローマ時代の遺跡発掘に目向けられたのは、アフロディシアスの発掘を指揮した K・T・エリムの功績によるところが大きい。古代の発掘美術品の密輸発覚に端を発し、トルコ政府は一九七〇年代以降、欧米諸国による発掘調査を制限する政策を採ったが、その間も、アフロディシアスの発掘は継続され、この内陸都市の、帝政前期から後期にかけての豊かな活力を証明する数々の遺物・遺構が明らかにされた。ところで、厳密には古典考古学の範疇に入るかどうか異論の余地はあるが、ここでも触れておくべきは、日本の辻氏と浅野氏をリーダーとして行われたゲミレル島の発掘であろう。この成果は二〇一〇年、待望の公刊を見た。K. Asano (ed.), *The Island of St. Nicholas. Excavation and Survey of the Gemiler Island Area, Lycia, Turkey*, Osaka University Press, 2010。我々のプロジェクトが内陸都市に関心を持つのに対し、このプロジェクトは海上交通のコンテキストにおけるリキア沿岸島嶼部の経済的重要性を背景にしたキリスト教の聖地の形成・発展に着眼して世界的にも高い評価を得ている研究である。

(26) J. S. Crawford, *The Byzantine Shops at Sardis*, Harvard, 1991; R. Cormack, 'The Temple as the Cathedral', *Aphrodisias Papers* 1, 1990, 75-88; R. R. R. Smith, and C. Raté, *Archaeological Research at Aphrodisias in Caria*, 1993, *AJA* 99, 1995, 33-58

(27) D. De Bernardi Ferraro, *Hierapolis*, in *Arsilantepe, Hierapolis, Iasos, Kyne: Scavi archeologici italiani in Turchia*,

- Venezia, 1993, 105-187; P. Verzone, Hierapolis di Frigia nel lavoro della missione archeologica italiana, *Quadri di la Riviera scientifica CNR* 100, 1978, 391-475; I. Claerhout, and J. Devreker, *Pessinos. Sacred City of the Anatolian Mother Goddess*, Homeritabevi Istanbul 2008; Devreker, J. & Waelkens M., *Les fouilles de la Rijksuniversiteit te Gen à Pessinonte, 1967-1973*, I-II. Brugge, 1984; M.A.V. Gill (with contributions by C.S. Lightfoot, E.A. Ivson, and M.T. Wypyski), *Amorium Reports, Finds I: The Glass (1987-1997)*, BAR International Series 1070, Oxford 2002; C.S. Lightfoot (ed.), *Amorium Reports II: Research Papers and Technical Studies*, BAR International Series 1170, Oxford 2003; K. Rheidt, Archäologie und Spätantike in Anatolien. Methoden, Ergebnisse und Probleme der Ausgrabung in Aizanoi, in: G. Brands und H.-G. Severin (Hrsg.), *Die spätantike Stadt und ihre Christianisierung*, Symposium vom 14. Bis 16. Februar 2000 in Halle/Saale, Wiesbaden, 2003
- (28) 二〇〇九年三月に東京大学で開かれた国際シンポジウムにおいてロンドン大学のCh・ルーシェは「現在エフェソス遺跡のランドマークともいえる「ケルソスの図書館」を復元するために古代末期の貯水池の遺構を記録も取らずに解体してしまったことをこのような発掘の代表例として紹介されていた。
- (29) Waelkens et al., *Sagalassos*, I-V
- (30) トルコの各大学隊によるキビュラやリュコス河畔のラオディケイア *Laodikeia* の発掘の進展には目を瞠るものがあり、大変なスピードで西部アナトリア内陸地帯の大都市の
- 威容が明らかになりつつある。
- (31) R. Haensch, Der Städte des griechischen Osten, in: Ders. (Hrsg.), *Selbstdarstellung und Kommunikation, Die Veröffentlichung staatlicher Urkunden auf Stein und Bronze in der Römischen Welt*, Vestigia Bd.61, 2009, 173-187 以下 附録の偏差に注意を喚起しつつある。
- (32) H. Vanhaverbeke, F. Martens, M. Waelkens, and J. Pohlme, Late Antiquity in the Territory of Sagalassos, in: W. Bowden, L. Lavan, and C. Machado, *Recent Research on the Late Antique Countryside*, Brill, Leiden, 2004, D. Baird, Settlement Expansion on the Konya Plain, *Anatolia: 5th - 7th Centuries A.D.*, *ibid.*, 219-246
- (33) 二〇一〇年秋に来日し関西と東京で講演を行ったJ・インホルズによれば「一九五〇年代から発掘されているアフロディシアスでさえ、なお城壁内の市街地の八割が未発掘という。ただし、一つの都市全体を掘りつくすのは難しいにしても、都市の中心的生活圏だった場所に複数のトレンチを開け、そこから発見される土器の破片のサンプリング調査によって土器の流通パターンや編年をくみ上げようとする試みが始まっていることは特筆しておくべきだろう。 Cf. J. Vroom, Late Antique Pottery, Settlement and Trade in the East Mediterranean; A Preliminary Comparison of Ceramics from Limyra (Lycia) and Boeotia, in: Bowden et al. (eds), *ibid.*, 281-331
- (34) 枚挙に暇ないが、今こゝではそうした方向の研究の隆盛をもたらした画期的な出来事、研究成果として一九八八年の *Journal of Roman Archaeology* 誌の創刊、一九九三

年 の S. E. Alcock, *Graecia Capta. The Landscape of Roman Greece*, Cambridge, 1993 刊行を挙げ、また方法論をめぐる論争の興味深い一例として A. Bowman and A. Wilson (ed.), *Quantifying the Roman Economy: Methods and Problems*, Oxford, 2009 におけるフエントレスとマッティンリーの論考のみを紹介しておきたい。碑文学については、小アジアを主たるフィールドに第二次大戦後の碑文学界をリードした L・ロバールの諸著・論考が何より参照され、踏まえらるべきである。

(35) 最近、南雲泰輔「古代末期」研究と考古学をめぐる一動向—Luke Lavan と「古代末期考古学」『古代史年報』8号、二〇一〇年が、二一世紀から始まった「古代末期考古学」をめぐる理論考古学者主体の「大西洋派」と経験主義的考古学者主体の「大陸派」の方法論的対立や、また「古代末期考古学」それ自体の存立の妥当性如何について論じている。私たちのプロジェクトもそうした新しい研究動向を意識はしているけれども、小アジアの考古学を取り巻く状況は、確認された古代の農村域居住地がこの五〇年間にわずかに二五〇〇件から十万件に劇的に増えたイギリスのような状況とは大きく異なっており、「古代末期考古学」が唱えるような高度に理論的方法論の適用が直ちに可能なわけではない。またマッティンリー（上註30参照）が指摘するような理論考古学の方法論的問題、さらに一部の理論考古学者が都市に農民は居住せず、農民はなべて農村に居住するものだということに単純でおよそありえない前提から出発しているという問題（上註三〇に挙げたフエントレスの研究の方法について筆者が抱く最大の疑問）もある。た

だし、南雲氏が指摘する考古学者の歴史学者化は、トルコ人研究者の間でも確実に見られる動向であり、出土碑文のテキスト／コンテキストの読解にも積極的にかかわろうとしている。他方、歴史家の考古学者化は、私たちのプロジェクトが歴史研究者主体で発想されたこと自体、その表れであるといえるが、それとほぼ時を同じくして、日本大学の坂口明氏をプロジェクトリーダーとするオスティアの考古学調査が始まったのも、同じ動向の中で理解されるであろう。トルコにおける発掘は、夏にシーズンが限られ、そのための労働ビザを前年の一二月までに申請しなければならぬ。資金確保ができないと私費で発掘を行わねばならないという日本人研究者にとって不利な条件下にはあるが、ヘレニズム・ローマ時代からビザンツ時代にかけての聖堂・聖域に関心のある、とくに若手研究者には、歴史や考古学といった垣根を越えてぜひ参加していただきたいと願っている。

(36) たとえば、マイアンドロス河畔のマグネシアのアルテミス・レウコフリユエネ神の祭儀。Inscriptionen von Magnesia am Mäander, Nr.100 A-B.

(37) たとえば、トロスの隣町オイノアンダのデモステネイアと呼ばれる二世紀設立の祭儀の詳細な規定。さまざまな賞金付き競技で一カ月近くも祭りは続いた。M. Wörle, Stadt und Fest im Kleinasien, C. H. Beck, München, 1988

(38) 帝国東部における宗教と権力の関係については、やや古いが重要な研究として D. R. Edwards, *Religion and Power: Pagans, Jews, and Christians in the Greek East*, Oxford, 1996 を挙げておきたい。オイノアンダの祭儀について

トロス司教座教会聖堂の発掘について (浦野)

- は、三世紀における優勝者の数多くの像の台座碑文が知られている。デモステネイアに代わってエウアレステイア *Euresteia*、アルテメイア *Artemia*、アンドロシイア *Androsia*、メラグレイア *Melegrida* といった創設者の名にちなんで名づけられた体育競技が盛んになる。A. Hall and N. Milner, Education and Athletics. Documents Illustrating the Festivals of Oenanda, in: D. French (ed.), *Studies in the History and Topography of Lycia and Pisidia. In Memory of A. S. Hall*, The British Institute of Archaeology at Ankara, 1994 三世紀の小アジアにおける競技祭の隆盛について、R. Ziegler, Städtisches Prestige und kaiserliche Politik. Studien zum Festwesen in Ostkilikien im 2. und 3. Jahrhundert n. Chr., Schwann Düsseldorf, 1985; Mitchell, *JRS* 80, 1990
- (39) 一二世紀まで、『コンスタンティノポリス管轄教会司教座表』 *Notitiae episcopatum Ecclesiae Constantinopolitanae* (*Geographie ecclesiastique de l'empire byzantine* 1, Paris 1981) に司教座として挙げられている。
- (40) O. Köse and R. Tekoğlu, *Atalya* 10, 2007, 63-76 に初出の 前二世紀の碑文は、個人の死後祭祀基金の創設を扱ったもので、大きな縦長の石の三面に刻まれたものであるが、そこに現れるさまざまな個人の部族名 (Iobates, Bellerophon, Sarpedon) からおそらくトロスかその近隣に由来するものと考えられる。Cf. R. Parker, A Funerary Foundation from Hellenistic Lycia, *Chiron* 40, 2010. これは現在個人蔵のコレクションに入っていて、発見場所が不明になっている碑の一例である。
- (41) *TAM* II 585
- (42) Cf. Robert, *Hellenica* 10, ; *OMS* VII 531-548
- (43) この碑文については上註一五参照。Janin and Adak, op.cit., 131 によれば、この条約は、その写しをレトオンの聖域、トロスのアルテミス神殿、オイノアンダのゼウス神殿、およびカウノスの四カ所に刻んで示すことを定めているという。
- (44) この都市にはアウグストウスの妻リヴィアの死後、ユリウス氏の繁栄と永続を祈念した競技会がリキア同盟のそれとして設けられた。 *TAM* II 549. Cf. Robert, *OMS* VII 35-48
- (45) P. Brown, Antiquité tardive, in: *Histoire de la vie privée*, Tome 1. De l'empire romain à l'an mil, Seuil, 1985, 225-300
- (46) R. Krauthemer, *Early Christian and Byzantine Architecture*, Yale University Press, 1986 (4th ed.), 99-103
- (47) しかし、おそらく、そのことから社会的・経済的活力の減退を論じるのは早計であろう。というのも、古代末期には、リキアでも山中の隔絶された場所に多数の教会や修道院が作られ、その周辺に数千人単位で居住する集落ができるとともに、人々はそこへ巡礼するようになったからである。こうした新しい社会的動向についての検証や評価は、いまだ十分になされていない。M. Harrison, *Mountain and Plain, From the Lycian Coast to the Phrygian Plateau in the Late Roman and Early Byzantine Period*, University of Michigan, 2001
- (48) ちなみに、H.-G. Severin, Aspekte der Positionierung der Kirchen in oströmischen Stätten, in: Ders (Hrsg.), Die spätantike Stadt und ihre Christianisierung, Symposion

vom 14. Bis 16. Februar 2000 in Halle/Saale, Reichert Verlag
Wiesbaden, 2003, 249-258

(49) 聖堂のアトリウムの囲壁は、今は崩れて北側の一部を残すのみであるが、かなりの高さ(四く五mか)を示す。ただし、構造上、この囲壁は聖堂に組み込まれていないので、聖堂自体より後代の建築と考えられる。

(50) B. Ward-Perkins, *Reconfiguring Sacred Space: from Pagan Shrines to Christian Churches*, in: Severin (hrsg.), 285-290

(51) バタラの大バシリカについては、A. Uluçam, in: *Kazı Sonuçları Toplantısı* 12/2, 1990 [1991], 37f. pl.8; F. Isik, *Lykia* 2, 1995, 186, pl.15 ペルゲのバシリカAについては、H. Rott, *Kleinasiatische Denkmäler aus Pisidien, Pamphylien, Kappadokien und Lykien*, Leipzig, 1908, 46-50

(52) トロスの聖堂は内のでアプシスから身廊の端まで三一・九m、翼廊の端から端まで三一・九m、前庭の長さ一八・二mである。これは、バタラの大バシリカ(それぞれ四三・五m、三三・三m、一七・五m)やペルゲのバシリカA(それぞれ四七・六m、三三・三m、二五・三m)に比べて小ぶりであり、また工法も、バタラやペルゲの場合のように切石積みではなく、さまざまな大きさの礫石をセメントで繋いだ素朴なものである。Krautheimer, *op. cit.*, 108はこのタイプのバシリカを小アジア南岸の地方的建築流派としている。

(本学文学部教授)

On the Excavation Project of Tloan Basilica: The Preliminary Report

URANO, Satoshi

ト
ロ
ス
司
教
座
教
会
聖
堂
の
発
掘
に
つ
い
て
(
浦
野
)

The excavation project of the main (probably episcopal) basilica in Tlos, one of the most prosperous cities in Lycia, has started since summer, 2010. The building is located at the centre of the civic public space, and thought to have been constructed on the former pagan sanctuary area (temenos) where the temple of Kronos, the civic main God, was also located to the south. The excavation will reveal when the basilica was constructed, what kind of building(s) it replaced, to what extent the former structure was destroyed and removed, how far the construction of the basilica worked on the changing aspects of the late antique civic life, how long the basilica survived and so on.